

プロコフィエフを めぐる

3話

2023年はロシアの大作作曲家プロコフィエフ(1891-1953)の没後70年にあたります。ちなみに彼は現ウクライナのドネツク州の生まれ。しかも独裁者スターリンと同日に亡くなるなど、話題に事欠かない人物でもあります。今回はそんな大家にまつわるお話を。

1 プロコフィエフと日本

プロコフィエフは、日本に来た史上初の作曲家です。彼は1918年、ロシア革命を機に国を離れ、アメリカに向かいました。これは当局の許可を得てのこと。まず5月7日にモスクワでシベリア鉄道に乗り、さらにウラジオストクから船で敦賀へ渡って、6月1日東京に到着しました。ここから南米経由で渡米する計画でしたが、船は出たばかり。そこで次便が出る8月2日まで日本に滞在しました。主に東京と横浜にいながら、京都、大阪、奈良、軽井沢、箱根を訪れ、7月6、7日に東京、9日に横浜でピアノ・リサイタルも開催。自

作のほかシヨパンやシューマンの作品を演奏しました。何しろ時は大正時代。聴衆は少なかつた模様ですが、今考えればもったいない話です。ただしこの間に小説(その中の『彷徨える塔』は、エツフェル塔が突然歩き出すというトンデモ話)も執筆していますし、関西で聴いた「越後獅子」が後の名作「ピアノ協奏曲第3番」のモティーフになるなど、滞在も無駄ではなかつたようです。

2 時代のめぐり合わせが悪い?

かくして渡米した彼ですが、何かと不首尾だつたため、1920年ヨーロッパに移り、主にパリで暮らしました。それでも成功には至らず、徐々に当時のソ連に戻るようになり。1932年にはほぼ帰国し、1936年には家族ともども完全復帰しました。しかし以前話を聞いたロシアの指揮者ラザレフはこう語っていました。「彼にはNo.1になるという野心がありました。ところが進出を図ったヨーロッパは、ストラヴィンスキーの帝国になっていました。No.1ピアニストを目指そうとしても、既にラフマニノフがいる。ただ、2人はソ連との関係を断っていました。プロコフィエフは、時おり祖国に戻り、歓迎を受けていました。そこで国民的英雄、すなわちNo.1として迎えられたいの期待を胸に帰国します。しかし今度は後輩

シヨスタコーヴィチとの闘いが始まりました。」
なおプロコフィエフは最後に、悪化していたストラヴィンスキー、シヨスタコーヴィチ両人との友好関係を回復しています。

3 名手あつてのチェロとの関わり

とはいえ、バレエ音楽《ロメオとジュリエット》、《ピーターと狼》、交響曲第5番など、現在親しまれている作品の多くが帰国後の所産。ソ連で強要された明快な音楽が逆に合っていたのか? 円熟期と重なつたからなのか? 何とも微妙なところだ。

そうした中、帰国したがゆえに書かれたのがチェロ絡みの傑作です。大きな要因は同国の名手ロストロポーヴィチの存在。その凄演を聴いてチェロへの関心を深めた彼は、1949年、ロストロポーヴィチの協力を得て、生涯唯一のチェロ・ソナタを完成しました。さらに最晩年の1952年、同様の協力のもと、既作の協奏曲を改編した「チェロと管弦楽のための交響的協奏曲」を完成。共にロストロポーヴィチが初演し、同楽器の重要レパートリーとなりました。他に企図された作品は未完に終わったものの、名手なくして2つの名作が生まなかつたのは確かです。

紀尾井 明日への扉

第34回 香月 麗 (チェロ)

[共演]
鈴木慎崇(ピアノ)

[曲目]
ドビュッシー : チェロ・ソナタ 二短調 L.135
プロコフィエフ : チェロ・ソナタ 八長調 op.119
[プロコフィエフ没後70年記念]
メンデルスゾーン: 無言歌二長調 op.109
メンデルスゾーン: チェロ・ソナタ第2番二長調 op.58

3/3
19:00

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

も、こうした背景を知って聴くと、より理解が深まるかもしれません。
文/柴田克彦(音楽評論家)



プロコフィエフとロストロポーヴィチ